

## 近隣保育入所児の保護者に対するう蝕予防の意識調査

著者	竹嶋 麻衣子, 広瀬 弥奈
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	29
号	1
ページ	110-110
発行年	2010-06
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006438/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006438/</a>

## [最近のトピックス]

## 近隣保育入所児の保護者に対するう蝕予防の意識調査

竹嶋麻衣子, 広瀬 弥奈

北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系小児歯科学分野

わが国ではこれまで長年にわたり、ブラッシング指導と甘味食品の摂取（食事、間食指導）を中心としたう蝕予防活動が展開されてきた（丹下ら，2001）．しかしこれらには，う蝕予防に対する明確な根拠はなく，1988年に米国・予防医療研究班（U.S. Preventive Service Task Force）が作製した予防医療実践ガイドラインでは，う蝕予防にはシーラントおよびフッ化物の応用が有効と評価されている．諸外国においては，これらのエビデンスに基づきフッ化物の応用が日常的に行われており，高いう蝕予防効果を示している．特に幼児期は，歯口清掃習慣などの基本的歯科保健習慣を身につける時期として重要であり，生涯を通じた歯の健康づくりに対する波及効果も高い時期といえる．従ってこの時期における適切なフッ化物応用の普及啓発はう蝕の減少を目指す本目標達成には必要不可欠といえる（広瀬ら，2006）．しかしながら，わが国では未だにフッ化物応用の普及率は低い．そこでわれわれは，現在のフッ化物応用の普及状況を把握し，その結果を基に，今後近隣小児保護者へどのような啓蒙活動が必要かを明らかにする目的で，保護者を対象にう蝕予防に関する意識調査を行った．

本調査では，本学近隣保育入所児の保護者344人に対し質問用紙を配布し，各家庭で記入したものを回収し集計した．調査項目は，主にフッ化物についての基本知識や応用に関する意識を問う内容で，32項目全て選択形式とした．

今回質問用紙を配布した保護者344名中，240名から回答が得られ，回収率は69.8%であった．統計学的分析は，年齢別，男女別，定期健診の受診の有無別に $\chi^2$ 検定を行った．その結果「虫歯予防法で最も重要なのはどれか．」という質問に，「歯磨き」を選択した保護者は全体の81.3%に対し，「フッ素」を選択した割合は8.2%であった．また「フッ素は体に悪いと思うか．」という質問に対しては，「悪い」が6.3%，「悪くない」が63.6%，「わからない」が30.1%（ $p<0.05$ ）で，「日本では上水道に人工的にフッ素を加えていると思うか．」に関しては，「加えていない」と正しい選択肢を選んだ者が45.8%占めているものの，「加えている」が0.8%，「わからな

い」を選択した保護者も53.4%（ $p<0.05$ ）と多く，フッ化物に対する正しい知識が乏しい事が示唆された．一方，有意差は認められなかったが，フッ化物配合歯磨剤を知っている人は全体の88.8%と多く，その使用率は67.5%であった．日本口腔衛生学会フッ化物応用委員会の報告によると，全国の3歳～6歳児のフッ化物配合歯磨剤の使用者の割合はおおよそ71%で（日本口腔衛生学会フッ化物応用委員会，2003），今回の結果は，全国平均に近い値であった．

フッ化物の応用には，フロリデーション，フッ化物洗口法，歯面塗布法，歯磨剤の使用による方法などがある．これらの応用は高いエビデンスが確立しているにも関わらず，わが国では社会全体に正確な情報が浸透しているとは言い難い．特にフッ化物洗口法（木本ら，2005）やフロリデーションに関しては，歯面塗布法や歯磨剤よりも認知度が低く，それらの応用に際しては，専門家による科学的根拠に基づいた正しい知識の啓蒙が今後の課題であると考えられた．

## 【参考文献】

- 広瀬弥奈，松本大輔，八幡祥子，福田敦史，千秋宣之，五十嵐清治：北海道石狩郡当別町内保育所児におけるフッ化物配合歯磨剤の利用状況．口腔衛生会誌 56：249-259，2006．
- 日本口腔衛生学会フッ化物応用委員会：フッ化物応用報告「わが国の幼児期ならびに学齢期におけるフッ化物配合歯磨剤の使用状況」．口腔衛生会誌 53：611-614，2003．
- 木本一成，晴佐久悟ほか：日本における集団応用でのフッ化物洗口に対する実態調査—「健康日本21」における2005年中間評価に向けて—．口腔衛生会誌 55：199-202，2005．
- 丹下貴司，広瀬弥奈，齊藤正人，野呂大輔，松本大輔，八幡祥子，坂口也子，水谷博幸，廣瀬公治，五十嵐清治：フッ化物応用によるう蝕予防法に関する本学学生の意識調査—歯学部1年生と6年生の比較—．東日本歯学雑誌 20（2）：193-203，2001．